

多文化教育環境におけるカリキュラムの研究

——日本語学校就学生に対する
進路希望調査を中心として——

久 村 研

I 背 景

本学では、2001年度から外国人留学生の入学者が飛躍的に増加した。日本語日本文化学科では、2000年度26名であった留学生入学者が、2001年度には79名と3倍以上に増えた。一方、英語コミュニケーション学科でも、同年度に留学生の受け入れをはじめ、31名の入学者を見た。2001年度は、1・2年を合計すると留学生数は136名となり、両学科学生総数の25%を超える割合となった。

一方、2002年度から、人間福祉学科の4年制大学移行に伴い、英語・日本語の両学科が統合され、短期大学部人間文化学科となる。入学者定員はこれまでの半数の150名に圧縮される。しかし、定員が半数になるからといって、日本の18歳人口と短大志望者の激減から、今後も留学生を相当数受け入れていく必要があると予想される。つまり、多文化教育環境が恒常的に続く見通しである。

新学科のカリキュラムは、相当数の留学生受け入れを視野にいれて作成されたものである。しかし、残念ながら、留学生に関するデータや調査に基づいたものではない。日本人学生と留学生とが融合し得る多文化教育カリキュラムを目指すのであれば、教員の経験と勘だけに頼るのではなく、データや調査が必要である。今後は、あらゆる場面を想定しながら、十分

な調査に基づいて、逐次カリキュラムの修正、変更が必要になってくるであろう。本研究はその第1段階である。

なお、本研究は日本私立学校振興・共済事業団の平成13年度経常経費特別補助「高等教育研究改革推進経費」に対し、英語コミュニケーション学科が申請し、その採択を受けて行われた共同研究である。担当部局責任者は学科長・橋本健一教授。今回の共同研究者は英語コミュニケーション学科・印藤京子教授、日本語日本文化学科・渡邊亜子専任講師、及び筆者である。具体的な作業は、企画の立案、計画書・アンケート等の原案を筆者が作成し、橋本、印藤、渡邊との協議を経て申請、あるいは、アンケート内容及び項目、調査方法を決定した。調査実施に当たって、日本語学校の選定は渡邊、依頼・訪問・調査用紙郵送は渡邊、印藤、筆者が行った。アンケートの翻訳、回収整理は、渡邊が本学の留学生、臨時助手を指導しながらその任に当たった。

以上のとおり、本稿は、共同研究者が共有する成果であるが、文責は執筆した筆者が負うものである。なお、本研究は今年度を含め3年計画であり、次年度にはスコット・リー助教授も加わることになっている。

Ⅱ 目 的

本研究は3ヵ年を目途に、前半の2年で日本語学校就学生の実態調査とそのニーズ・アセスメント、3年目で多文化教育環境にふさわしいカリキュラム・シラバスのデザインを提案することが目的である。

本稿では、この計画に沿って行われた日本語学校就学生に対するアンケート調査結果を報告し、それに考察を加えることによって、今後の研究課題を明らかにする。

Ⅲ 方法

1. 調査対象者：本学に入学実績のある日本語学校の就学生。
2. 調査方法：まず日本語アンケートを作成し，中国語，韓国語に翻訳（各表裏印刷1枚）。3部を綴じて，あらかじめ依頼しておいた日本語学校10校に必要部数を持参，または，宅配便で送付。各日本語学校には独自の方法でアンケートを実施，回収，さらに，宅配便で回答を送付していただく。
3. 期間：2001年6月からアンケート作成にかかり，2002年1月15日までに回収終了。
4. 測定具：アンケート用紙日本語，中国語，韓国語の各バージョン。
Statistica ver. 5.5, Microsoft Excel 2000
5. 回収整理・翻訳：アンケート回収整理，中国語版・韓国語版の翻訳はそれぞれ本学の臨時助手と留学生にお願いした。
6. 集計作業：集計・統計表の作成は印藤基正氏に委託した。

Ⅳ 結果

1. アンケート実施校，回答数，回収時期，回収率

当初のアンケート回収目標数は1000名であった。各日本語学校のご協力のおかげで，目標に近い数を集めることができた。暮れから年始にかけての忙しい時期に，ご協力を賜ったことは感謝にたえない。早稲田文化館におかれては，当方の送付時期が遅れ，ご心配を頂いた。ご無理をお願いするに忍びず，丁重にアンケートを廃棄くださるようお願いした。

表1 アンケート実施結果

アンケート送付校	依頼数	回答数	回収時期
飛鳥学院	300	255	2001年12月
興和日本語学院	100	57	2001年12月
横浜国際教育学院	200	138	2001年12月
新宿日本語学校	200	146	2002年1月
ダイナミックビジネスカレッジ	100	75	2001年12月
新世界言語学院	50	34	2001年12月
赤門会	300	135	2001年12月
翰林日本語学院	50	42	2002年1月
東京ランゲージスクール	50	49	2002年1月
早稲田文化館	150	0	
合計	1500	931	
回収率		62.1%	

2. 回答者基礎データ

アンケート質問項目（補遺参照）の質問1～6は回答者個人の基礎データに関してである。それぞれの集計結果を図表で表す。

1) 年齢・性別構成

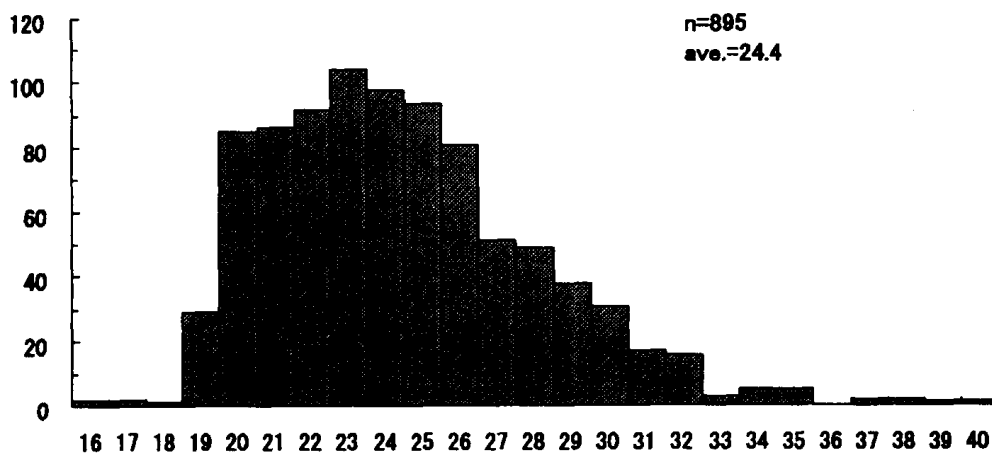


図1 回答者の年齢構成（年齢無回答を除く）

表2 回答者の性別構成（年齢・性別無回答を除く）

	男性	女性
回答者数	404人	480人
平均年齢 (ave.)	24.7才	24.2才

表3 出身国別最終学歴人

人数/％

	高校	専門学校	2年制大学	3年制大学	4年制大学	その他	計
中国	207	90	29	108	84	17	535
(構成比:%)	38.7	16.8	5.4	20.2	15.7	3.2	100.0
香港	25	11	0	2	1	3	42
(構成比:%)	59.5	26.2	0.0	4.8	2.4	7.1	100.0
韓国	97	17	49	1	104	20	288
(構成比:%)	33.7	5.9	17.0	0.3	36.1	6.9	100.0
台湾	9	7	4	0	11	1	32
(構成比:%)	28.1	21.9	12.5	0.0	34.4	3.1	100.0
タイ	0	1	0	0	4	1	6
(構成比:%)	0.0	16.7	0.0	0.0	66.7	16.7	100.0
マレーシア	6	1	0	1	1	0	9
(構成比:%)	66.7	11.1	0.0	11.1	11.1	0.0	100.0
ベトナム	3	0	1	0	3	1	8
(構成比:%)	37.5	0.0	12.5	0.0	37.5	12.5	100.0
その他	5	3	0	0	3	0	11
(構成比:%)	45.5	27.3	0.0	0.0	27.3	0.0	100.0
計	352	130	83	112	211	43	931
(構成比:%)	37.8	14.0	8.9	12.0	22.7	4.6	100.0

注：網掛け部分は、各国での最大学歴層。以下、表の網掛け部分は最大値を表すものとする。

2) 出身国及び最終学歴

アンケートでは、中国出身者に対して出身省を書いてくれるよう要請したが、無回答、判読不能が多く、記載の比較的多かった香港を除き出身省は本稿では扱わないこととする。また、男女別の総計は次のようになる。列の順序は表3に同じ。

表4 男女別最終学歴（年齢無回答を含む） 人数（%）

男	176 (42.3)	49 (11.8)	26 (6.3)	50 (12.0)	97 (23.3)	18 (4.3)	416
女	171 (34.2)	80 (16.0)	56 (11.2)	58 (11.6)	111 (22.2)	24 (4.8)	500
(性別不明)	5 (33.3)	1 (6.7)	1 (6.7)	4 (26.7)	3 (20.0)	1 (6.7)	15
総計	352 (37.8)	130 (14.0)	83 (8.9)	112 (12.0)	211 (22.7)	43 (4.6)	931

3) 職業歴の有無

質問では「母国での職業歴」をたずねている。従って、出身国別の構成比を見る。

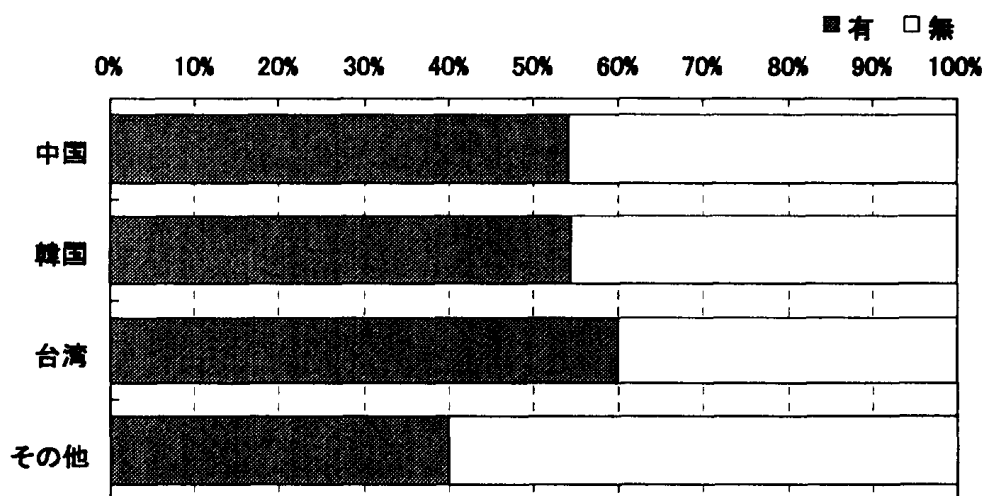


図2 出身国別職業歴の有無（構成比）

職業歴のある回答者には、その職業を記載するよう要請したが、本稿の目的からそれを省略する。

ちなみに、最終学歴別では、2年制大学卒業者が75%程度で職業歴の比率が1番高く、高卒者は40%弱で最も低い。専門学校、3年制・4年制大学出身者は55~65%の間である。男女別では、共に50%を越えているが、女性の比率が若干高い。

4) 外国語学習経験

「母国で学習したことのある外国語」を選択してもらったので、この場合も出身国別の学習経験比率を見たほうが有効である。

表5 出身国別外国語学習経験

%

	日本語	英語	韓国語	中国語	その他
中国	53.9	70.2	11.3	16.3	3.3
韓国	60.1	75.3	7.6	4.2	14.6
台湾	43.8	75.0	0	28.1	18.8
その他	52.9	94.1	0	38.2	29.4
全体	55.4	72.8	9.3	13.8	8.3

注：1. 中国には香港を含む。比率は、学習経験者数を出身国の全数で除した
もの。

2. 1人が複数の語学を学習しているケースが多いため、各出身国ごとの比率の合計は100%を超える。したがって、人数での考察には意味が認められないと考え、比率のみの表記とした。

3. 韓国出身者が「外国語」として韓国語を学習したというのは誤回答かとも思われ斜体で表記した。

質問では、学習経験をたずねただけなので、学習期間については不明である。日本語については、中・高あるいは大学まで継続して学習した者から、来日直前に短期間学習した者まで含まれている可能性がある。また、

最終学歴別の集計をとっても、出身国別との有意差は認められなかった。

5) 進路希望

質問6では、日本語学校修了後の進路希望を、第1～第3志望まで以下の項目から選択してもらった。

- 1) 大学院 2) 4年制大学 3) 短大 4) 専門学校
5) 帰国して就職 6) 日本で就職 7) その他 ()

志望順位を考慮した構成比は、回答されたものの加重得点、つまり、第1志望に3点、第2志望に2点、第3志望に1点を乗じた相対比率で表す。また、無回答は解釈の対象から外した。さらに、進路希望は最終学歴によって異なるものであるから、最終学歴別に集計することが最も意味のあることと考えた。

表6 最終学歴別進路希望（希望順位を考慮した構成比） %

	高 校	専門学校	2年制大学	3年制大学	4年制大学	その他	計
大 学 院	3.9	3.6	4.4	12.9	28.3	10.9	10.6
4年制大学	40.8	36.2	37.7	42.4	14.8	23.8	33.7
短 大	10.3	10.4	6.6	9.3	1.7	4.1	7.7
専 門 学 校	25.5	28.3	24.3	16.9	18.0	19.2	22.8
帰 国 就 職	8.4	11.8	12.5	6.9	17.2	21.2	11.5
日 本 就 職	8.0	7.9	8.1	9.7	12.1	10.4	9.2
そ の 他	3.1	1.9	6.4	1.8	7.8	10.4	4.4
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表は示さないが、第1志望から第3志望までの集計結果を補足しておこう。第1志望では、数値はすべて上回るが、各学歴層とも表6と全く同じ傾向を示している。第2志望では、「専門学校」(17.7%)、「日本就職」

(11.7%), 「4年制大学」(10.1%)の順位だが, 4年制大学出身者は, 「帰国就職」と「日本就職」が共に14.2%でトップである。第3志望においては, 「帰国就職」(16.8%)と「日本就職」(10.7%)の2項目だけが二桁である。また, 無回答は, 第1志望では「その他」を含め5.6%, 第2志望では「その他」を含めず32.5%, 第3志望は同じく49.7%であった。このことから, 外国人就学生の日本留学の目的は, かなりはっきりしていると言えよう。一方, 短大志望者数は, 第3志望までを含み179名(全回答者931名の19%)であった。

以上の結果から, 「第1志望は4年制大学, 次は専門学校, それでもダメなら日本留学経験をテコに, 帰国して就職」という考え方が, 日本語学校就学生の標準的な傾向であると言える。

3. 大学選定基準と希望専攻分野

質問7からは質問6で第1～第3志望のいずれかに大学院, 4年制大学, 短大を選んだ回答者に答えてもらう形式をとった。度数は, 大学院181, 4年制大学547, 短大179である。

1) 大学の選定基準

質問7では, 大学院, 4年制大学, 短大の選定基準を以下の13項目から順位をつけて3つ選んでもらった。

- (1)社会的名声 (2)規模(学生数など)が大きいこと (3)通学の便利さ
- (4)施設のよさ (5)環境のよさ (6)カリキュラムの内容 (7)教育の質
- (8)学生の質 (9)学費が安いこと (10)友人・知人がいること
- (11)留学生の数が多いいこと (12)アルバイトのしやすさ
- (13)その他()

順位をつけてもらったので, ここでも加重得点から相対比率を出して図で表す。各選択項目の度数を第1基準に3点, 第2基準に2点, 第3基準

に1点を乗じ、総合得点を全体合計数で除し、指数とした比率である。また、大学院志望の度数が第2位であるが、本稿の趣旨から、4年制大学と短大志望を数値化の対象とした。つまり、4年制志望者と短大志望者との間に、選定基準に差があるかどうかを見ることも調査の観点の1つに含まれるからである。

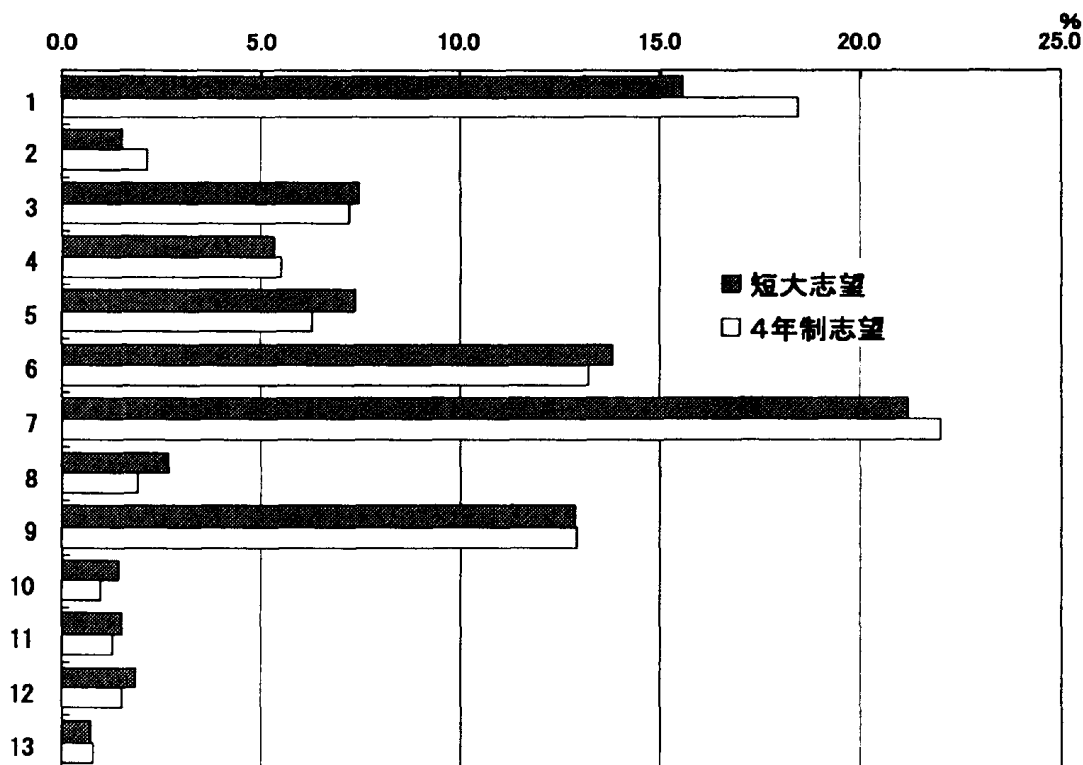


図3 大学の選択基準

(第1～第3基準数値化。短大：n=179，4年制：n=553)

「教育の質」が選定基準のトップとなったが、実はどのような「質」を求めているかは、ここでは曖昧である。第3位の「カリキュラムの内容」も同様である。この2点に関しさらに今後調査する必要がある。第4位の「学費が安いこと」は、第1基準でも4位だが、「通学の便利さ」と拮抗して、その比率は7%台である。「教育の質」(第1基準では26%前後)と「カリキュラムの内容」(同23～28%)が充実していれば、学費はそれほど問題にしていないということか。

2) 希望専攻分野

質問8では希望専攻分野を聞いている。以下の14項目から第1希望と第2希望をあげるよう指示した。

- (1) 政治 (2) 経済 (3) 法律 (4) 語学 (5) 文学 (6) 文化・歴史
- (7) 経営・商学 (8) 科学・技術 (9) 情報 (コンピュータ含む)
- (10) 医学・薬学 (11) 保健・体育 (12) 福祉・介護 (13) 芸術・デザイン
- (14) その他 ()

4年制大学と短大志望者の第1・第2希望を、それぞれ単純に合計し、その相対比率を出したものが次の図である。

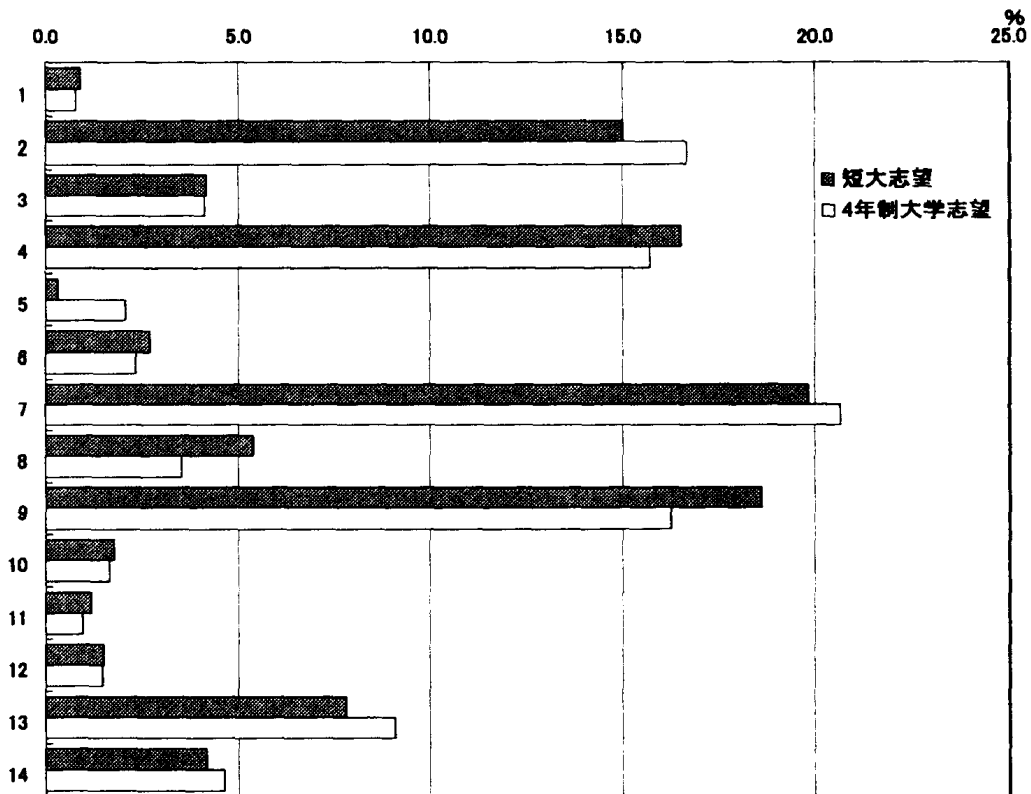


図4 専攻したい分野 (合計：構成比)

短大の第1希望では、1位「経営・商学」、2位「語学」、3位「経済」で、4年制では「語学」と「経済」が入れ替わる。短大の第2希望では、1位「情報」、2位「経営・商学」、3位「語学」で、4年制は3位に「経済」が入り、1位2位は短大と同じである。上記の図では、短大の「情報」

が2位で「経営・商学」に迫っているが、これは第2志望にあげている回答者が多数いることによる。つまり、人気のある分野をグループに分けると、短大も4年制も、第1グループは「経営・商学」「語学」「経済」であり、「情報」は単独で第2グループを形成していると考えられる。このことから、純粋に情報の分野に進もうというより、「情報」の重要性を認識している結果と解釈できる。

4. 希望する授業内容

質問9では、進学を希望する大学にどのような授業があるとよいか尋ねた。選択肢は次の11項目で、「あるとよい」と思うものには○、「どちらともいえない」と思うものには△をつけてもらった。

- (1) 日本の漫画やアニメなどを紹介・分析する授業（授業1）
- (2) 日本の漫画やアニメなどの作成技術を学べる授業（授業2）
- (3) 日本や世界の株式市場の動向を紹介・分析する授業（授業3）
- (4) 日本社会の仕組みや人間関係がわかる授業（授業4）
- (5) 新聞・雑誌を用いて国際情勢がわかる授業（授業5）
- (6) 日本語を母国で教えるための日本語教育の授業（授業6）
- (7) インターネットを用いて海外と英語でメッセージ交換ができる授業（授業7）
- (8) コンピュータを用いて自己表現ができる授業（授業8）
- (9) 落語や漫才を研究したり、楽しんだりする授業（授業9）
- (10) フィールドワークを中心にした体験的な日本文化の授業（授業10）
- (11) その他（自由に書いてください）（授業11）

集計に当たって、○を2点、△を1点と換算し、これを合計数値で除し、構成比率を出した。

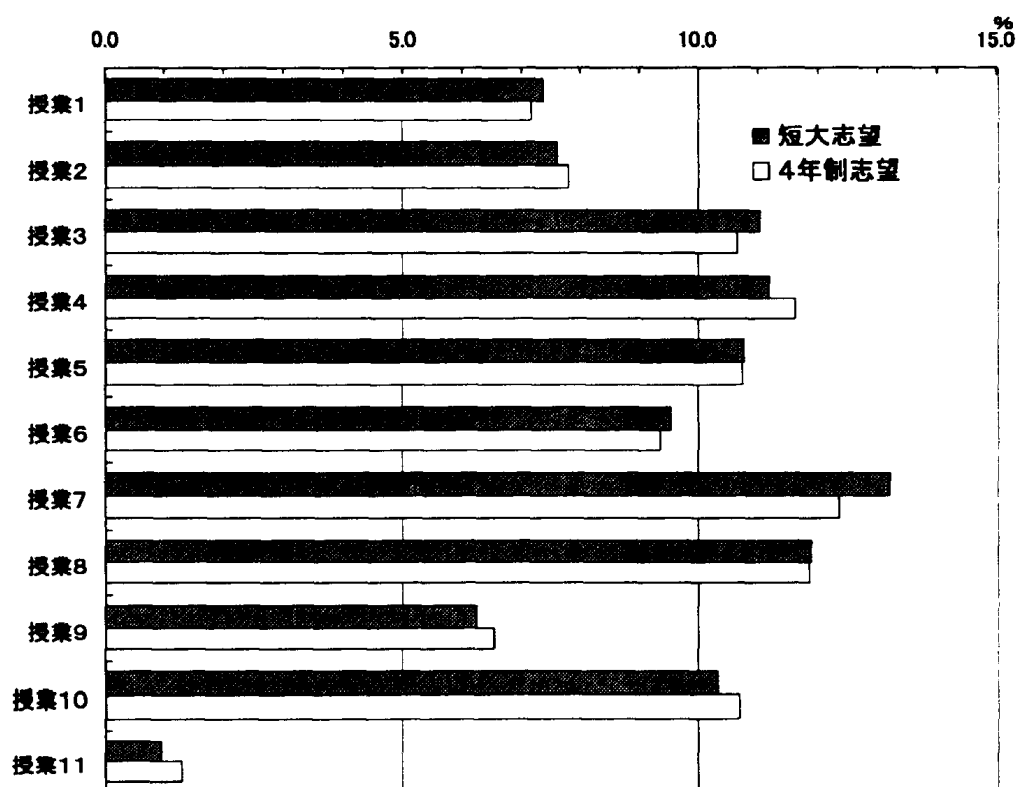


図5 大学への希望授業

予想通り、コンピュータ（インターネット）を用いて自己表現をする授業、経済の動向や国際情勢に関する授業、日本の社会や文化の体験的な授業に希望が集まった。一方、今や世界をリードする日本の漫画やアニメに関して支持が低かったのは意外であった。

5. 英語学習について

質問10, 11では英語学習の希望と、その目的について尋ねた。この質問の目的は、英語の授業科目を設定する際に参考とするためである。

1) 英語学習の希望

進学を希望する大学で、英語の勉強をするつもりかどうか尋ねた。選択肢は「する」「しない」「どちらともいえない」の三択である。短大志望者と4年制大学志望者とに分けて集計した。

表7 英語学習の希望

人数/％

	する	どちらとも	しない	全体
短大	143	26	10	179
構成比(%)	79.9	14.5	5.6	100.0
4年制大学	436	99	18	553
構成比(%)	78.8	17.9	3.3	100.0
全体	579	125	28	732
構成比(%)	79.1	17.1	3.8	100.0

注：進学希望は第3志望までを含む。

予想通り、「する」が圧倒的である。英語の学習経験のない学生（全回答者931名のうち250名）でも、「しない」とはっきり答えているのは6.2%にすぎない。ほとんどが「英語の勉強をしたい」と考えていることが判明した。

2) 英語学習の目的

最後の質問11は、前項で「する」と答えた回答者を対象に、英語の勉強の目的を、次の12項目の中から順位をつけて3つ選んでもらった。

- (1)日常英会話の習熟 (2)新聞・雑誌などの英語読解力の習熟
 (3)テレビ・ラジオなどの聴解力の習熟 (4)英文法と英作文能力の習熟
 (5)ビジネス交渉などの英語の習熟 (6)観光関係に使われる英語の習熟
 (7)TOEFL, TOEICなどの得点力アップ (8)英米文学作品の読解力の習熟
 (9)英語から日本語への翻訳能力の習熟 (10)通訳術の習得
 (11)科学技術の専門書の読解力の習熟 (12)その他()

順位をつけてもらったので、第1目的に3点、第2目的に2点、第3目的に1点を乗じて、加重得点を出し、それを全体合計で除して構成比を出した。

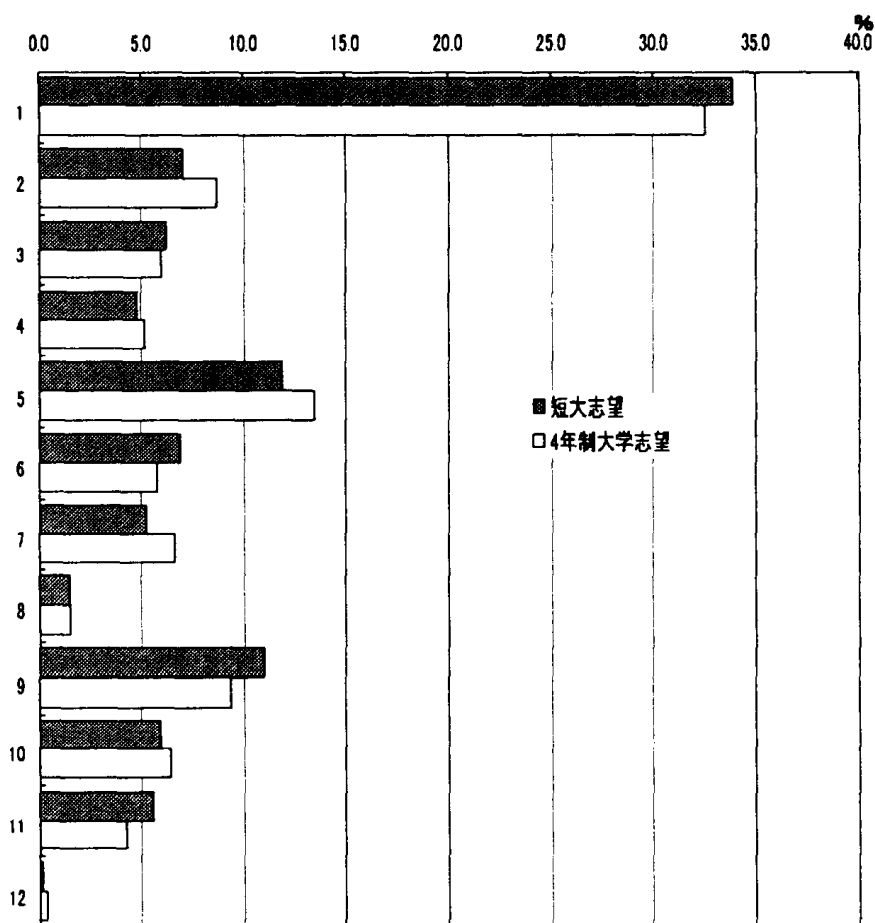


図6 英語勉強の目的 (指標：構成比)

第1目的は短大も4年制も圧倒的に「日常英会話の習熟」である。短大の第2目的を見ると、1位「ビジネス交渉などの英語」、2位「英語から日本語への翻訳能力」、3位「新聞・雑誌などの英語読解力」、4位「観光関係に使われる英語」である。4年制では1位は短大と同じで、2位「新聞・雑誌などの英語読解力」、3位「日常英会話」で、「英語から日本語への翻訳能力」は4位である。短大の第3目的は、1位「英語から日本語への翻訳能力」、2位「新聞・雑誌などの英語読解力」、3位「通訳術」。4年制は、1位「新聞・雑誌などの英語読解力」、2位「通訳術」、3位「英語から日本語への翻訳能力」と短大とかなり順位に差が出てくる。図6はこうした結果を反映したものとなっている。また、図6で4年制の5番目にきている「TOEFL, TOEICなどの得点力アップ」は、第1～第3目的の上位に

はこないが、それをめざす学生が少なからずいることを示している。一方、「英米文学作品の読解力」はいずれも最下位で、若者の文学離れを顕著に示す結果となった。

V 考察と課題

1. 基礎データから見た考察と提案

母国で専門学校以上を卒業し、何らかの職業について後日本に来る就学生の割合が過半数を上まわっている。従って、年齢構成は、23歳を頂点に20歳から26歳までが大きな集団となっている。一方、日本語学校修了後の進路希望は、「第1に4年制大学、次に専門学校、それでもダメなら帰国して就職」と考えている就学生が多いことが判明した。残念ながら、短大を志望する学生の数は極めて少ない。

アンケートでは、日本に来た目的に関する質問項目を立てなかった。これは、日本語学校修了後の進路希望を取れば、自ずと明らかになると考えたからである。しかし、20代の半ばになって、わざわざ日本に来て、4年制大学に入学したいと思っている動機は、この調査からは判明しなかった。短大入学を考えている就学生たちの動機はさらに不明のままである。

一般的な日本人は、「日本は世界の先進国で、経済的にも学問的にも他のアジア諸国よりはるかに進んでいる」と考えているフシがある。だから、留学生が来るのだろうか。江副（2001）はこの点きっぱりと否定する。

シンガポール、香港、マレーシア、韓国、北京の空港と成田空港を比較すると、成田空港の規模や設備は貧弱である。JRの自動改札システム（SUICA）が日本ではニュースになるが、香港に行けば地下鉄はすべてそのシステムで動いている。高速道路のETCシステムは、マレーシアの高速道路にもある。ブロードバンド（ADSL）の加入は、日本では数万円かかるが、韓国では基本は只である。日本の大学では、人事などに力が入りすぎ、留学経験のある大学教員そのものが少数派に近い。しかし、韓国では、大学

で教壇に立つ教員の半数以上が米国で修士や博士を取っている。従って、コンピュータの重要性を理解していたので、大学でのコンピュータ導入は素早かった。

江副は、「総体としての差は明らかに日本の方が低い」とし、台湾からの学生、及び、韓国出身で日本の大学進学を希望している学生の数が増えていると指摘している。さらに、日本語のみを学習目的とした就学生のうち、韓国人学生は、現地の大学を休学して日本に来ている者が多くなっていると言う。理由は、「学生のうちに異なる文化を吸収し、就職時点では、既に、最低一カ国語はマスターしておいたほうが有利であるという発想から」であるから、「日本の大学も認識を改めた方がいい」と提言している。

この江副の提言は、現在の、あるいは、今後の就学生及び留学生の動向に関して、ひとつの側面しか述べていないかもしれない。しかし、希望者の少ない短大にとって大きな示唆を与えるものである。つまり、日本語学校の就学生の年齢、学歴、職業歴から判断すると、これ以上短大志望者が増えるとはとても考えられない。今後はさらに厳しい状況になると予想される。とすると、認識を改めて、短大の特徴を積極的に生かした方策やカリキュラムを立てる必要がある。筆者は、次のふたつの方策は、実現の可能性があると考える。

ひとつは、韓国、台湾を中心に、現地の大学と提携し、日本語をマスターするための1年間のコースを設定すること。つまり、日本の大学が欧米に学生を留学させることと逆の発想をすればよい。もうひとつは、日本の短大から現地の4年制大学の日本語コースに3年編入できるシステムを開発することである。現地の大学との協定書の作成、受け入れる学生に対するカリキュラムや指導体制などの技術的な問題はあるが、本気で取り組むならば、可能性は十分にあるし、留学生の数も質も、安定したものとなるはずである。

2. 大学選定基準，希望専攻分野・授業に関する考察と課題

大学選定基準の第2位「社会的名声」は、現在のところいかんともしがたい。しかし、第4位の「学費が安いこと」は実現していることである。先にも述べたとおり、全体として、「教育の質」「カリキュラムの内容」がよければ、この「学費」については第2選定基準になる。つまり「安かろう、悪かろう」では学生は来ないということだ。要するにポイントは、「教育の質」と「カリキュラムの内容」に絞られる。だが、今回の調査ではその中味まではわからなかった。これは次年度の調査に委ねたい。

しかし、「教育の質」と「カリキュラムの内容」を解明する手掛かりは、希望専攻分野と希望授業に多少現れている。希望専攻分野の第1グループに来るのが「経営・商学」「語学」「経済」で、それを補足するのがコンピュータを含む「情報」である。本学の「人間文化学科」のカリキュラムに不足しているのがその中の「経営・商学」「経済」の分野である。希望授業においても「日本や世界の株式市場の動向」「新聞・雑誌を用いた国際情勢」の授業に人気が高い。開講科目や教員の補充を含め、これらの分野を今後どのようにカリキュラムに反映させていくかがポイントになるだろう。また、「語学」「情報」をこれらの分野とどのようにリンクさせていくかも大きな課題となる。前項の提案とは別に、十分時間をかけて検討していく必要があるだろう。

一方、コンピュータ（インターネット）を用いた自己表現や日本の社会や文化の体験的な授業は現在のカリキュラムに組み込まれているが、その内容に対する検討をさらに重ねていく必要があるだろう。

3. 短大英語教育の目標設定

就学生の70%以上が日本に来る前に英語を学習した経験を持っている。さらに、大学進学後英語を勉強したいと考えている学生は80%に及ぶ。英語学習の目的の断然トップは「日常英会話の習熟」である。

日本に来て「英語も学びたい」と考えるのは、現在の世界情勢から見て当然と言えば当然である。しかし、「英語を勉強すること」が日本に来た主たる目的ではないはずだ。もしそうなら、日本ではなく英語国に留学するはずである。「日常英会話の習熟」が、日本での英語学習の第1目的であるということは、裏を返せば、母国で日常英会話を勉強しなかった。あるいは、英語が話せるようになりたい、という単なる願望の現れに過ぎないと言える。現在20代半ばの就学生は、母国ではコミュニケーション主体の英語教育 (Communicative Language Teaching → CLT) を受けていないのである。しかし、今後の若い世代は状況が変わるであろう。特に、韓国、台湾からの就学生は英語に対する要求が異なるはずだ。

韓国では、既に数年前から CLT に基づいた英語教育が、親と教師が一体となって進められているという (緑川, 報告書印刷中)。さらに、日本より早く小学校でも CLT に基づいた英語教育が導入され、盛んに教員教育・研修が行われている (Lee 2000)。台湾でも、CLT 英語教育が定着し、2001年に小学校5・6年生の英語教育がはじまった (施2000)。

今や、日本の初等中等学校における英語教育は、近隣アジア諸国より立ち遅れてしまった。日本で英語や英会話を勉強しよう、などと思う若者は2～3年後にはいなくなる可能性がある。もしその可能性があるとするれば、母国で英語を勉強しなかった学生、及び、日本の4年制大学の英語入試を受けようという学生だけになるだろう。

こう考えると、短大の留学生のための英語教育の方向が見えてくる。つまり、英語を学習した経験のない学生と4年制編入を希望する学生に対応する2種類の講座を用意することだ。さらに、英語力のある4年制編入希望の留学生をできるだけ獲得することが肝要である。彼らには、この調査結果で上位に入った「英語から日本語への翻訳能力」をつけ、「ビジネス交渉などの英語」の基礎力を養い、国公立大学や、有名私学へ編入させることを考えていくべきだろう。これは、日本人学生にも通じる、短大の英語

教育の目標の1つとなるはずである。

参考資料

- 江副 隆英 (2000) 「日本語学校就学生の現況と今, 留学先に期待するもの」『新宿日本語学校 学校運営研究(2)』
- 施 玉恵 (2000) An Evaluation of the Primary School English Teachers' Training Program in Taiwan. 第39回 JACET 全国大会基調講演。沖縄国際大学
- 舟橋 洋一 (2000) 『あえて英語公用語論』文春新書
- Lee, Hyo-Woong (2000). English Education in Korean Elementary Schools. 第39回 JACET 全国大会基調講演。沖縄国際大学
- 緑川日出子 (印刷中) 『平成13年度現職英語教員の教育研修の実態と将来像に関する総合研究』英語教員研修研究会

補 遺

留学生アンケート

次のそれぞれの質問に対し、あなた自身のことについて教えてください。答え方は、当てはまる項目を選んで、その項目の前にある□の中にチェック記号(✓)をつけるか、または、()内に必要事項を書いてください。

質問1. あなたの年齢を()内に書いて、当てはまる性別に✓をつけて下さい。

年齢 () 歳, □男 □女

質問2. 出身はどちらですか? 4)の「その他」の場合は、出身を書いてください。

□1) 中国 □2) 韓国 □3) 台湾 □4) その他()

*中国とお答えの方は、出身省を書いてください。()省

質問3. 母国での最終学歴は次のどれですか? 大学卒の場合には専攻した科目を()内に書いてください。

□1) 高校 □2) 専門学校 □3) 2年制大学()

□4) 3年制大学() □5) 4年制大学()

□6) その他()

質問4. 母国での職業歴がありますか。ある場合には、職業を()内に書いてください。

□1) ある() □2) ない

質問5. 母国で学習したことのある外国語は1)~4)のどれですか。5)の「その他」の場合は、学習した外国語を()内に書いてください。

□1) 日本語 □2) 英語 □3) 韓国語

□4) 中国語 □5) その他()

質問6. 日本語学校修了後、どの進路に進むつもりですか。第1～3志望を、下の1)～7)から選び、番号で書いてください。7)の「その他」の場合は()内に書いてください。

第1志望(), 第2志望(), 第3志望()
 1) 大学院 2) 4年制大学 3) 短大 4) 専門学校
 5) 帰国して就職 6) 日本で就職 7) その他()

(質問7からは、上の質問6で1)～3)を第1～第3志望に選んだ人が答えてください)

質問7. どんな基準で大学院、4年制大学、または短大を選びますか。下の1)～13)から順位をつけて3つ選び、番号で答えてください。13)の「その他」の場合は()内に書いてください。

第1番目(), 第2番目(), 第3番目()
 1) 社会的名声 2) 規模(学生数など)が大きいこと
 3) 通学の便利さ 4) 施設のよさ 5) 環境のよさ
 6) カリキュラムの内容 7) 教育の質 8) 学生の質
 9) 学費が安いこと 10) 友人・知人がいること
 11) 留学生の数が多いいこと 12) アルバイトのしやすさ
 13) その他()

質問8. 次のどの分野を専攻したいですか。下の1)～14)から選んで2つ選び、第1希望、第2希望の順で番号を書いてください。14)の「その他」の場合は()内に書いてください。

第1希望(), 第2希望()
 1) 政治 2) 経済 3) 法律 4) 語学 5) 文学
 6) 文化・歴史 7) 経営・商学 8) 科学・技術
 9) 情報(コンピュータ含む) 10) 医学・薬学 11) 保健・体育
 12) 福祉・介護 13) 芸術・デザイン 14) その他()

質問9. あなたが進学を希望する大学にどのような授業があるとよいと思いますか。次のうち「あるとよい」と思う授業には○、「どちらともい

えない」と思う授業には△を書いてください。

- () 1) 日本の漫画やアニメなどを紹介・分析する授業
- () 2) 日本の漫画やアニメなどの作成技術を学べる授業
- () 3) 日本や世界の株式市場の動向を紹介・分析する授業
- () 4) 日本社会の仕組みや人間関係がわかる授業
- () 5) 新聞・雑誌を用いて国際情勢がわかる授業
- () 6) 日本語を母国で教えるための日本語教育の授業
- () 7) インターネットを用いて海外と英語でメッセージ交換ができる授業
- () 8) コンピュータを用いて自己表現ができる授業
- () 9) 落語や漫才を研究したり、楽しんだりする授業
- () 10) フィールドワークを中心にした体験的な日本文化の授業
- () 11) その他（自由に書いてください：
 - ()

質問10. あなたが進学を希望する大学で、英語の勉強をするつもりですか。

- する しない どちらともいえない

質問11. 上の質問10で「する」と答えた方におたずねします。どのような目的で英語の勉強をするつもりですか。次の1)～12)のうち順位をつけて3つ選び、番号で答えてください。

12)の「その他」の場合は()内に書いてください

第1番目(), 第2番目(), 第3番目()

- 1) 日常英会話の習熟 2) 新聞・雑誌などの英語読解力の習熟
- 3) テレビ・ラジオなどの聴解力の習熟 4) 英文法と英作文能力の習熟
- 5) ビジネス交渉などの英語の習熟 6) 観光関係に使われる英語の習熟
- 7) TOEFL, TOEICなどの得点力アップ 8) 英米文学作品の読解力の習熟
- 9) 英語から日本語への翻訳能力の習熟 10) 通訳術の習得
- 11) 科学技術の専門書の読解力の習熟 12) その他()

ご協力ありがとうございました。今後のご活躍を期待しています。